巻頭言

丙辰(ひのえたつ)の初春を迎えて

津　和　秀　夫*

丙辰のとし

甲乙丙……の10干と子丑寅……の12支とを組み合わせた干支（えと）は，玄妙な天地の真理を表わす法則として，古来重要視されてきた．天地・社会・人生の総べての現象が干支の示す年まわりによって左右されている．つまり干と支の組み合わせによって，その年が社会・人生にとってどのような意味を持つかが決まってくる．

一昨年は甲寅，昨年は乙卯，そして今年は丙辰という年まわりになる．まず干の方から説明しよう．今年は甲から乙へと続いたあとの丙である．甲はものごとの始まり，草の芽が硬い殻を破って地表に出て来る勢いを表わす．つまり新らしいことが，一昨年から始まっているということになる．つぎの乙はその芽が字の通りに曲ったりくねったりで，伸び悩む年を表わす．昨年の不況や総べての事象は，この乙の年から来ている．今年の丙は物事の伸びる年，「炳」という字に当たっている．スッキリとしてあきらか，そしてタフで強いということになる．しかし丙の字には冂のかこいがあるように，一定の限度が厳存するので，無謀な驀進は禁もつということになる．

十二支のうちの辰であるが，これは龍を当てはめているように，全く勢があって天に昇るという年である．辰という字は「振」とか，「震」という字と同じ意味で，いろいろ難かしい意味はあるが，要するに理想に向って辛棒強く着実に，ふるい立てということである．

結局，今年の「丙辰」は，過去の甲，乙の年のことをふまえて，しかもそれらにあまりこだわらずに勇気をもって新らしい道を進めということ，しかも一定の限度を守って，つつましやかに我が道を行けという年である．だからこの方針で社会，事業，家庭，人生の総べてに処すれば間違いがない．

「高品位」への歩み

一昨年の甲の年から始まった一つの歩みは，量を目指しての生産から，質を目標とするものへの転換だった．ところが昨年の乙の年には，この転換が思うようにはかどらず，しかも旧い時代の残照としての量の生産も捨て切れず，苦しみ悩み戸惑っているうちに，年の瀬を迎えて，歎息すると同時にあきらめたというのが，世の流れである．

そして迎えた新らしい春は，まさに干支の教える通りの「丙辰」である．道はすでに一昨年の甲の年から決まっている．その道を勇気と自信を持って，しかも一つの限界を考えながら，着実に進むことが，丙辰に処する道である．

「質」を目指すとき，念願せねばならないことは，「高品位」ということである．品位が高いということは，科学的に分析することができない．しかし，人は直観的に「品位」の高いものと低いものとを見別けることができる．この高品位に向って，地道に限度をふまえて，ふるい立つのが，新らしい「丙辰」の年である．

*「生産と技術」編集委員長，大阪大学工学部，精密工学科，教授